

七月の幼児童謡

葛原 しげる



七月は夏も真夏です。この月末には幼稚園でも、小學校でも、夏の休暇のはじまる月です。そして八月一ぱいは、ごちらでも、暑すぎて勉強も遊戯も出来ないといふのですが、しかし、戸外に出ます、植物も、動物も、活々としてをりまして、見ても面白く、友達としては最も面白く、子供も、おのづから活々として来る夏です。誰かは、夏日の長いのをよろこびましたが、私は、日が長くて、いろいろの事をするのに、都合のよい點に於て、夏を悦びます。「暑さ」は、意外に苦にならぬらしい幼児の世界に於て——

東京の町の真中でも、よく見かけますが、幼児は、ぎょうして、あんなに、土いちり、砂いちりが好きなんでせう。道路工夫が、まだ工事を始めないで、トラックか何かで運

んで来て、小山のやうに、入道に積み上げておく砂を附近の幼児が、見つけて出て来て裸足になつて、夢中でいぢつて遊んでゐるのをよく見かけます。

全く、一心不亂で砂いちりをしてゐるのです。車道では電車が込合はうが、空では雨が催して来ようが、そんな事にはお構ひなしで——。

この砂場は、この幼稚園にも、托兒所にもありますが、そこでの遊びは、大體同じです。山を造り、穴をあけて——。

即ち、まづ、砂を掘つて、掘つた砂は積上げて、小高くして、その小さな山の中腹にはトンネルを掘るのです。そして、山には木を植ゑたり、草を植ゑたりして、ほん物の山を想像してゐるのです。そこで、ほんまの山のトンネル

の積で、「ピー」を鋭く、汽笛一聲後は、「ゴー／＼／＼」
と汽車の突進です。

「銀砂」は、きれいに光る何かも交つてゐて美しい砂で
す。そして、此の題が「お砂場遊び」でないことに、御注意
の上、次の御くらべ下さい。

——砂のトンネル——

葛原しげる作歌
弘田龍太郎氏曲

銀砂サク／＼もり上げて

お山が出来た

高い 高い

お山に トンネルくりぬいて

おもちゃの汽車を

ビーゴ／＼

(川に浮れて)

次のは、同じ「お砂場遊び」でも、前のがトンネル本位で
あるのに對して、お砂場遊びそのものなのです。この第一
節では、お砂場遊びのお道具を並べました。しかも、一人
で、でなくて、「皆で」です。第二節は、前の砂の『トンネル』
と同じ作業ですが、汽車の擬聲を、「ポッ、ポッ、ポッ」に
しました。前者の「ピー、ゴー、ゴー」を、さちらが、幼児向
でせうか。これは、曲趣の影響もありますから歌詞からだ
けでは論ぜられませんが、變化のあるのは、勿論、「ピーゴ

／＼」の方ですが「ポッ」のいふ破裂音の三回もの反復も、
スタカット鋭くします時、かなり、效果的であります。

かうした擬聲、擬態を、その「音」への再現の研究は、
實演童話の方でも、極めて、大切な役割をもつものである
こと、御経験の通りです。幼児にまつては、童話は「はな
し」であり、童謡は「うた」であるといふ一つの約束を拔出
して共通のものゝある事は愉快です。

——お砂場遊び——

葛原しげる作歌
梁田 貞氏作曲

一 皆の好きなお砂場遊び

おしやもじもつて、バケツをもつて

皆で、砂場へ出かけませうよ

砂場をさして、一、二、三

二 こんなに高いお山が出来た

草木をうゑて、谷川つけて

お山の下には、トンネルほつて

おもちゃの汽車を、ポッ、ポッ、ポッ

(大正幼年唱歌第七集)

戶外運動で、ブランコの愉快は、前へ、後への、反復、
また、その反復の正しさの心易さ、紛れのない事、不安
のない事の悦びです。そしてこれは、き、ちなくない、なめ
らかな運動であることの快感でもあります。ですから、一

度、乗つて漕ぎだしたら、仲々、代りたくなく、下りたくないの、いつまでも、漕ぎつゞけてるみたいので次の番のものが、

「先生、〇〇さんが、代つて下さらないんです」

と訴へたり、元氣ものゝ太郎君、次郎君が

「こら、下りろ」

「もう、代らないか」

と、漕いでゐるブランコに、飛びついて急に止めようとして、一緒に怪我をしかねないのです。そこで、

「十まで、こいだら代りませう」

としておきました。この「十」は實は、問題でして、少し、早すぎる、これも案じてをります。唯、幼稚園程度の數の數へ方に於て、十以上は無理でせうし、曲のリズムからも、「二十まで漕いだら」「三十まで」よりは、「十まで」の方がゆつたりして、スウキンギングの氣持を、よく現はしますので、十にしたのです。

——ブランコ——

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

ブランコ ブランコ

こげよ こげよ

かぞへて こげよ

一つ 二つ 三つ 四つ

十までこいだらかはりませう

(大正幼年唱歌第二集)

夏の遊びの中に、涼しげであり、見る目も輕快であり、美しくもあるものに、『シャボン』玉遊びがあります。そして、その輕快、その美しさの他に、壊れ易いものであるだけに、吹き吹き大きくして、破壊させないで、管から離れさせ、空中に浮かせ得た時の嬉しさ、また誇らしさ——しかも、きつと、すぐ、上昇しすぎるか、何かに突當つて、ぱつとほんまに、ぱつと瞬間に、消えて一滴ボタリ！、さうしたモメンタルな生命である事にも、氣持よさがあつてか、幼児は、まことに好きです。

此の二篇の中、前者は、まづ、フウフウ吹きさへすれば、クルクル廻り廻り膨れる不思議をいひ、後者は、それが、フワフワゆれて、キラキラ光る美しさを扱ひました。しかも、あくまで輕やかに——。

しかし、圖にのつてゐるを、破れ易く、はしやぎすぎてはならぬ事を戒めて

「あんまりふくれて破れるな」

「あんまり上つて破れるな」

と、たしなめておきました。

後者も、大體、同じ狙ひ方です。シャボン玉が生れる「こいひ」、「こはれてきた」こいふ所に苦心があります。折

角のシャボン玉が、さばずに、すぐ、こはれて消えるさ
ふ運命の淋しさ。

そこで、風に、吹くなご頼んで、改めて、飛ばさうかい
ふのです。

——シャボン玉——

ふくれるくシャボン玉

フウく吹けばクルく

まはつてふくれる管の先

あんまりふくれて 破れるな

あがるよくシャボン玉

フワくゆれてキラく

ひかつて上るよ空高く

あんまり上つて 破れるな

(大正幼年唱歌第二集)

野口 雨情氏歌
中山 晋平氏曲

——シャボン玉——

シャボン玉 さんだ

やねまで さんだ

やねまで さんで

こはれて きえた

シャボン玉 きえた

さばずに きえた

生れてすぐに

こはれてきえた

風風吹くな

シャボン玉 さばそ

(童謡小曲三)

水鐵砲は、大人にさつては、幼児に水を汲んでやるため、
縁側を濡らされる爲、幼児の着物が、ビショくになり勝
なため、かなり厄介でもある代物ですが、しかし、幼児本
人には、愉快です。殊に自作の水鐵砲である時に、さいひ
たいのですが、實は、幼児には作れないでせうが、大人が
手傳つてやつて「私のつくつた」こととしておいてやつて下
さい。まことに、めでたい水鐵砲です。

——水 鐵 砲——

八波 則吉氏歌
平岡均之氏曲

私のつくつた水鐵砲

お池の水で ためましたら

らくく屋根をこしました

やねの雀も にげました

上手に出来て うれしくて

庭へも水を打ちました

植木の葉にも かけました

シュッく打ち出す水鐵砲

(童唱名曲全集一)

涼しさそのものゝ様な音を立てゝ、夏の軒か縁の上からか吊下げられてゐるものが、風鈴です。そしてこの風鈴は寝てゐる赤ちやんが、夢の中で笑顔をした時に、風鈴が涼しく、ちりちりなりました、さいふのです。そして、寝ながらの笑顔を、夢の中でも風が吹いて、風鈴が、ちりちりなつた、さいふのです。美しい想像ですね。

— 風鈴 —

川路 柳虹氏歌
草川 信氏曲

風鈴ちりちり くなりました

あかちやん すやくねましたよ

風鈴ちりちり になりました

につこさあかちやん 笑ひます

夢の中でも 風吹いて

風鈴ちりちり なつたでせう

(童唱名曲全集一)

○
夏の花多きの中に、幼児に親しみ易いものに、朝顔があらります。そして其の美しさは、あくまで、新鮮です。あくまで、スマートです。何の色のも、みな。

又、この花の最も特殊なる性質は、朝早く咲いて、午後までは咲き残る事なく、如何にも、短命な花です。そして早起の競争をして、急いで起出して来てみても、やはり、この花の方が、きつこ、毎朝早く咲いてゐるのです。その

勤勉振に心すべきです。また此の全篇は一種の驚きを表はさうとしたものです。

— 朝顔 —

葛原しげる作歌
梁田 貞氏作曲

あれ きれい 垣根に きれい

これ ここに あそこにも

赤白紫 いろさま／＼の

らつばの形の朝顔が

あれ きれい 垣根に きれい

これ ここに あそこにも

朝はやく さんなに早く

出て見ても さいてゐる

お目々をさまして ニョ／＼顔に

す／＼しいお庭に咲いてゐる

朝はやく さんなに早く

出て見ても さいてゐる

(大正幼年唱歌第十集)

夏の夏らしい景物の中に、いつでもあるのですが、噴水こそは、最も夏にふさはしい景物です。噴水を、ぢつと見てゐますと、ひつきりなしに、全く、ひつきりなしに、シユウ、シユウとばかり、よくも休まず、よくも疲れずに、噴き出すこゝです。高く上つて、如何にも、氣持よささうです。ですから飽くこゝを知らず、眺めつゞける事が出来ま

す。それが時々、風に、横から吹かれて、サラ／＼と顔に當る涼しさ、氣持よさ、全くもつて、噴水は、夏のものです。ごこかでは、この噴水の水柱に、ピンポンのボールを噴き上げ、噴き上げさせてあるのを見ました。割竹の細いので、圓錐形のか、こひを造つて、その外へは落ちない工夫をしてある爲にボールは水柱から、時に、外れても、又噴上げられるのでした。また、あるごころでは、その水柱の頂上に、蜻蛉が、ごまらうごして、近づいては、時に、水柱が、急に高くなつたり、低くなつたりするので、見當をつげかねて、ごまりかねてゐるごころがありました。それを眺めつくしてゐますご身も心も、暑さを忘れてしまふのでした。

さて此の歌曲は、「シユウ／＼／＼／＼」のメロデーの特異なう、ま味で、幼児を悦ばすごきいてをります。例の擬態です。

—— 噴 水 ——

お池の噴水 おもしろい
ひつきりなしに水柱

シユウ／＼／＼／＼

高く上つて おもしろい
お池の噴水 すゞしいな

葛原しげる作歌
梁田 貞氏作曲

風に吹かれて 霧の雨

サラ／＼／＼／リ
顔にあたつて すゞしいな

（大正幼年唱歌第二集）

夏は動物の多い中で、最も可愛らしいものは金魚です。その尾鰭の美しさ。美しい其の尾鰭を、ゆらり、ひらりご、舞ふやうに、ひるがへして、泳ぎまはる豊けさ——これを歌つたものも他にありますが、次のは、金魚のさうした特徴でなくて、晝寝をしてゐる金魚です。一體、水の中の魚は、人間のやうに、お蒲團の中に横になつて寝入るごころがあるのでせうか。金魚を見てゐますご、少しも動かないで、ごつきしてゐる時があります。その時寝てゐるのでせうか。眼は開いたまゝであり、口や鰓にあたる所を見ますご、水を、のんだり、はいたりしてゐるのですが、あれでも、寝てゐるのでせうか。

何にしても、金魚のひるね、は、面白い題目です。しかし、寝てゐる金魚——金魚を見るものにまつて物足らなさは、その動かないごころです。そこで、

「お目々をさませば、御馳走するぞ」

ご、人間扱ひにしても、金魚は、すまして寝入つてゐるのですから、返事のしやうもなく、動き出して、泳ぎ廻る事

もしないのです。所が、急に、ブク〜ミ、あぶくを吐いたので、はつミ氣がついて見るミ、金魚も目がさめて来たのです。尾が少し、鰭が少し動き出しでもしたのでせうね。

— 金魚のひるね —

鹿島 鳴秋氏歌
弘田龍太郎氏曲

赤いべべ着た

可愛い、金魚

おめめをさませば

御馳走するぞ

赤い金魚は

あぶくを一つ

ひるねう〜く

ゆめからさめた

(お山のお猿)

金魚でなく、小さな鯉は、金魚みたいに、ガラス器なごに入れて、室内で飼つてゐるのでなくて、お池に飼つてゐるのです。それに、麩を投げてやりますミ、大よろこびで寄つて来て、つ〜くのです。それは、特に大きくもない麩ですが、鯉が小さいので、小さな口では食べられないので、押し廻してばかりゐるのです。その時、泡ばかり、ぶく、ぶくミ吐きます。さうした滑稽味、また、ぢれつたさは、幼児にも分るでせう。

— 小さな鯉 —

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

小さな鯉に 麩をやるミ
大よろこびで よつてきて

皆で バク〜

つ〜きます

つついてみても たべられぬ

麩は大きくて たべられぬ

皆でぶく〜 泡ばかり

(大正幼年唱歌第二集)

次は、思ひ切つて大きな動物、グロテスクな動物、水中の動物「河馬」です。それを可愛らしく「ちゃん」をもつて呼んで、

「こわい顔でも見たいのよ」

さいふのです。恐い物見たさは、大人にもありますが、幼児も、禁止された事は、して見たくなり、見たら大變なものも、見たいのです。一種の好奇心以上の反抗心かも知れません。但し、河馬は、グロそのものです。それが見たいのはその昔、ビリケンが愛玩されたのミ、同じ心持かと思はれます。

— 河馬ちゃん —

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

河馬ちゃん 河馬ちゃん

出ておいで
水の中から
出ておいで

みんな 河馬ちゃん

見たいのよ

河馬ちゃん 河馬ちゃん

こわい 顔

いつも ぎょうして

こわい 顔

こわい顔でも

見たいのよ

(昭和幼年唱歌三)

蝙蝠は、高空へは舞上りません。人家の棟なぎより高くは飛ばないで、多く、夕暮の蚊なきを捕ららしいのですが、草履でも、下駄でも投上げてやるミ、急に、それを狙つて寄つて来て、地上近く落ちて来るのを追掛けても、下駄と一緒に地上には落ちないで、又急に、氣を替へ、向を替へて、空へ舞上ります。そこで思ひきつて、三日月さんを喰はへて来い、ミ、いふのですが、幼児にはちミ、分りませんでせうか。

——かうもり——

富原 義徳氏歌
佐々木すぐる氏曲

かうもりこい かうもりこい

夕焼空から おりてこい

紅緒のかつこを くはへてこい

かうもりこい かうもりこい

お湯屋の煙突 まはつてこい

三日月お月さん くはへてこい

(童唱名曲全集一)

夏の音楽家は、秋のこほろぎ、松蟲、鈴蟲、くつは蟲、鉦たゝきなぎの様に多くは居りませんが、しかし、蟬の聲の大きいこミ、それ等の秋の蟲の聲はすべてを合せて一つにしても叶はない程の音量です。その蟬にも種々ありますが、一番、音楽的なのは、ミン〜蟬ミ、カナ〜蟬です。何れも、夏の來たのを悦んで、鳴くのでなく、讚美して歌つてゐるのでせう。お倉の向ふで「こいひ」お庭の中で「こいひましたのは、その所在が分らなくつて、聲だけが聞えてゐる事を、いはうこしたのです。全く蟬の聲は、遠音もさせば、強くも鋭くもあるのです。何でも、蚤の跳躍力ミ、蟬の音量ミに比して、人間のそれは、非常に弱く小さいものだとも聞きました。人間は、その點に於ては、蚤ミ、蟬ミに、顔色無しですね。次の二篇とも同じ想ですが、後者の「夏だ夏だ」ミ悦んでゐるミ見るのは兒童にも「暑い」ミ弱音をはかしたくないからです。

——ミンミン蟬がないてゐる——

葛原しげる歌
梁田 貞氏曲

ミンミン蟬がないてゐる

向かふの森でないてゐる

大きなこゑで よいこゑで

一生懸命 ミーン ミン

ミンミン蟬がないてゐる

夕日をおびた森の木で

涼しいこゑで よいこゑで

夏だ 夏だ さ ないてゐる

——せみ——

お倉の向ふで ないてゐる

ミンミン蟬が ないてゐる

大きな聲で ミンミン

夏が来たのを よろこんで

ミンミン蟬が ないてゐる

ミンミン蟬が ないてゐる

お庭の中でも ないてゐる

カナカナ蟬が ないてゐる

大きな聲で カナ~~~~~

夏が来たのを よろこんで

カナカナ蟬が ないてゐる

カナカナ蟬が ないてゐる

(大正幼年唱歌第二集)

夏の動物中、わけて男兒が一番好きなのは、さんぼです。

一體、都會でも、田舎でも、さんぼを捕へる男兒の心持は、

さんなのでせう。捕へる事そのものが面白いのですが、憎

いからさか、また、おいしいからさか、啼かせる爲さか、

そんな功利的な考は、毛頭ないのです。逃げるのを捕るこ

いふ事の他に、興味も、目的もありません。それで、蜻蛉

の方でも、男子の振廻すも、竿に、すれすれに飛廻つて、

危く、つかまらないで、逃げるのです。まるで、人間の事

を、からかつてゐるのかさへ思へます。

かうした蜻蛉が、捕りたい蜻蛉が、すぐ眼の前に、竹の

葉にしまつてをるのです。捕らうかき、忍び足で近よつて

行くき、竹の葉が、ちよいと揺れて、蜻蛉は眼をさました

のですが、それでも、舞上らうとも、逃出さうともしませ

んのは、まだねむいのでせう。そんなら捕らないで、ねか

して置きませうか。

——さんぼ——

竹の葉つばに さんぼがさまる

さんぼ しまつて ひるねした

さんぼ ねむくて おひるねか

竹の葉つばがちよいとゆれた

さんぼ たまげて 目がさめた

さんぼ ねむくて おひるねか

野口 雨情氏歌
中山 晋平氏曲

(童唱名曲全集一)

蜻蛉の中の、やんまは大きいですね。あれが、夕空の涼風を切つて、鮮やかに飛んで来る姿の立派さ。如何にも、「兩翅をひろげた」といふ言葉さほりに、しつかり、延べて、

広がった兩翅のすつきりしてをりますこと。

それを思つて、「こんで来い」を迎へる氣持です。此の曲の、すんでゐて、鋭い中に、スキートな情のこもつてをりますこと——極めて單純なのですが……。

葛原しげる作歌
梁田 貞氏作曲

——さん ぼ——

さん ぼ さん ぼ

来い 来い

兩翅ひろげて

涼しい風に

スイスイ こんで来い。

さん ぼ さん ぼ

来い 来い

兩翅ひろげて

涼しい御空を

スイスイ こんで来い

(大正幼年唱歌第六集)

夏の楽しみ最大のなるものは、長休みの来る事です。その楽しみは、毎年の事ですが、楽しい幼稚園通ひも、さる

ことながら、これは又、格別の楽しみです。殊に、都會生活のものには、山や海に親しむ唯一のチャンスでもありませんから、大に楽しませたいのです。

次の二篇とも、同じ内容ですが、後者は、山と、海との説明をして、具體的に、山と海を楽しませしめ、父母と、兄弟とをあしらつて一層の期待をかせせました。

——夏 休 み——

永島洋太郎氏歌
江澤清太郎氏曲

もうぢき来る夏休み

今年山へ 行くだろうか

それとも海へ 行くだろうか

早く来い〜夏休み

もうぢき来る夏休み

山へ行つたら 山登り

海へ行つたら泳ぎませう

早く来い〜夏休み

——夏 休 み——

葛原しげる作歌
梁田 貞氏作曲

(童唱名曲全集一)

明日から嬉しい夏休み

どこへ まゐりませう

お山には 冷たい水がわいてます

父さま 母さま

御一しよに、お山へまゐりませう

夏休み

明日から嬉しい夏休み

ごこへまりませう

うみべには涼しい風が吹いています

兄さま 姉さま

御一しよに、うみべへまゐりませう

夏休み

(大正幼年唱歌第十一集)

幼児の中には、海よりも山の方がよい體質、性質のもありますが、多くは、海岸には、「波」をいふ不斷の活動家があるて、幼児を飽かしめないでくれます。波こそは、自然の保姆ですね。よくも疲れず、よくも飽かないで、幼児を遊んでくれます。この波を遊んでゐるを、知らぬ間に時は過ぎて、「いつか日がくれ、月が出て」です——しかし、そんなに長く海岸で遊ばせておいては、お腹が冷えますから、さつくに、引上げた後は、「波は、ひきりで鬼ごっこをしてゐるでせうね、を、幼児を入浴しながら、チャブくしても見ませうね、を、これは、次の二篇の前者で、後者は、波を遊んでゐる面白味です。

林柳波氏歌
宮原禎次氏曲

——さんぶりこ——

さんぶりこ さんぶりこ

さんぶりこ さんぶりこ

濱邊の砂で遊んでる

波を子供の鬼ごっこ

さんぶりこ さんぶりこ

さんぶりこ さんぶりこ

いつか日がくれ 月が出て

波はひきりで 鬼ごっこ

——波よこいこい——

波よこいこい 此處までこい

あんよのここまで やつてこい

白いおくつを ぎりにこい

波よこいこい 此處までこい

おひざの上まで やつてこい

赤いバナツを ぎりにこい

波よこいこい 此處までこい

手のなるここまで やつて来い

ドンくザブリをよせて来い

(童唱名曲全集一)

鈴木素風氏歌
小松耕輔氏曲

(童唱名曲全集一)